

(2) 心理学教育FD/IT活用研究委員会

本委員会(委員長:木村 裕、早稲田大学)は、20年7月、8月、10月、21年2月の計4回開催した。心理学の学士力をどのように捉えるべきかについて、「心理学部や心理学科で学ぶ心理学」「教養科目として学ぶ心理学」「各種資格のために学ぶ心理学」等があるが、専門科目としての心理学を対象に資格取得に偏向することなきよう留意するとともに、心理学を通じて身につけた能力を生活面、社会面で活用できる能力を想定した。当初は、①人間の心や行動現象の原因を客観的手法を用いて解析できること、②個人的要因と社会・文化的要因の影響を理解出来ること、③人の気持ちを理解し、公平に判断する3つの能力を掲げて、心理学担当教員(サイバーFD研究員)482名にインターネットで意見を求めたところ40名から意見があった。その結果を踏まえて、見直しを行い、面接・観察・検査・調査・実験の方法や統計的・質的分析などの心理学的手法を用いて、要因を整理できるようにすること。また、個性・能力・動機などの内的要因、社会や文化による外的要因、生物学的要因の影響を受けていることの理解力とした。なお、「公平に判断する能力」については、一般常識で心理学固有の能力ではない等の意見があり削除した。新たに統合学習として心理学の知識・技能を活用して自己と社会の諸現象の理解に応用できる能力を追加し、以下の通り中間的にとりまとめた。

<心理学教育における学士力>

1. 人間の心や行動が、生物学的要因、個人的要因および社会・文化的要因の影響を受けていることを理解できる。
2. 科学的な手法を用いて、人間の心や行動に関わる現象の諸要因を明らかにできる。
3. 様々な心理学的理論や技能を用い、自己および社会の諸現象の理解に応用できる。